

自由論題 C (歴史)

司会：馬場毅 (愛知大学)

C-1 葛建廷 (創価大学大学院文学研究科 DC3)

「中国第2次国内革命戦争時期の土地改革分析」

C-2 石井弓 (東京大学教養教育高度化機構)

「『順口溜』から読み解く抗日戦争の記憶」

司会：内田尚孝 (同志社大学)

C-3 楊韜 (名古屋大学国際言語文化研究科)

「生活書店の募金活動について」

C-4 土田哲夫 (中央大学経済学部)

「日中戦争期の宋美齡——1942~43年訪米外交成功の背後」

C-1 (13:30~14:20)

中国第2次国内戦争時期の土地改革分析

葛 建廷

1931年の『江西省政府の土地問題にかんする布告』および『土地問題提綱』（江西省、県区ソヴェト政府主席合同会議、1931年9月1日より少し以前と推定）の両文献は、分配土地に対する農民の私有を認めており、とくに前者は賃貸、売買の自由を認めている点で注目される。

1934年、清澗県でソビエトが樹立され、1935年春には、綏徳県東区で土地分配が行なわれた。綏徳県で土地分配を行なったのは、栗林坪、崔家湾、義合、延家川、定仙場等の〈聯保〉である。米脂県の桃花埠および綏徳県の吉鎮一帯、米脂県の西部、綏徳県の周家嶮および横山県の石湾一帯では紅軍の遊撃隊が活動し、これと共に米脂の東部と西部に革命委員会、貧農会が成立し、村落では政治宣伝が行なわれ、食糧が分配された。しかしこれらの地域は強固にならず、土地も分配されなかった。

上述の土地分配を行なった地域のうち、若干の市・町および拠点は終始国民党軍によって占拠されていたため、土地分配されず、また赤区と白区の境界地区でもある地方では土地が分配されなかった。したがって、土地を分配した地区としなかった地区とが入りまじっている。

当時は、どのように土地分配を行なったのであろうか。まず革命によって創設された地区を単位に人口と土地の統計をとり、同時に全村の討論を経て階級区分を行ない、1人ひとりの階級所属を確定する。この後、次の原則にもとづいて分配が行なわれた。

- (1) 反革命の豪紳、地主、高利貸、富農の土地は全部没収する。
 - (2) 勤労富農はその土地の一部を没収する。
 - (3) 中農の土地は動かさない。
 - (4) 貧農、雇農に土地を分配する。
 - (5) 〈巫神〉〔祈祷師〕、〈陰陽〉〔占い〕、〈流氓〉〔無職の遊民〕等は、一家がこれで生活している場合は土地の全部を没収し、家庭内に他の勤労者がいる場合は一部を没収する。
- 上述地区、当時土地が分配された地域の調査を通じて、当時中国農村実態を分析したい。

「順口溜」から読み解く抗日戦争の記憶

石井 弓

「順口溜」は口頭で歌い伝えられる短い覚え歌のようなものである。村の出来事を歌い、不出来なものは1日で忘れられるが、うまくできたものは1日で村中に広まる。そして長いものは、100年以上も歌い継がれている。「順口溜」は、出来事に対する辛く悲しい想いを歌い込み、それに共感した聞き手が次の歌い手となる。共感の連鎖によって伝えられ、出来事の記憶を共有させる働きをする。方言で歌われることから、コミュニティ内での共有が強く意識されている。

発表者は、これまで山西省孟県の30村195名に聞き取りを行い、抗日戦争を歌った「順口溜」を集めてきた。その中から特に調査地域でよく知られる「趙家莊惨案」（趙家莊で起こった虐殺事件）の「順口溜」を取り上げ、それがなぜ作られ、どのように歌われ、そして歌い継がれる過程でどのように変化してきたかを分析することで、地域で共有される記憶のあり方を考えたい。

「趙家莊惨案」は1944年に日本軍が行った虐殺事件である。25名の村民が村の水窖（水溜井戸）に投げ込まれて殺害された（『孟県誌』1995年）。しかし、『孟県誌』のような文献資料と、口述を記録した『孟県文史資料』、そして「順口溜」では、事件の「語り方」が異なる。日本対中国という枠組に事件を位置づける文献資料に対し、『孟県文史資料』は、村外からやってきた聞き手を意識した語りとなる。これに対し「順口溜」は、村内で歌われることを目的とした内部の語りであり、聞き取りによっては知ることが難しいコミュニティ内の戦争の語りを読み取ることができる。これらの比較から、ひとつの事件をめぐる歴史と記憶の関係を考察する。

「趙家莊惨案」の「順口溜」は、各村で関心のある部分のみが歌い継がれ、各世代が覚えている歌詞も少しずつ異なる。ここから、村人の関心や時間経過による記憶の変化を読み取る。そして、趙家莊で事件の記憶が今ある形の歌として共有される理由を考察する。

生活書店の募金活動について

楊 韜

生活書店は、近代中国、とりわけ日中戦争期において大きな影響をもたらした出版機構である。鄒韜奮（1895-1944）は上海のセント・ジョーンズ大学を卒業後、中華職業教育社で週刊機関誌『生活』の編集に携わった。1932年、鄒韜奮は中華職業教育社から独立し、生活書店を創設、引き続き週刊誌『生活』を発行した。その後、『新生』、『大衆生活』、『抗戦』など多くの出版物が生活書店から発行され、生活書店は近代中国の代表的な出版機構の一つとなった。これまでの先行研究は、主に生活書店の出版物における抗日言説の分析を中心に行われた。たとえば、石島紀之氏の「抗日民族統一戦線と知識人——「満州事変」時期の鄒韜奮と『生活』週刊をめぐる——前編」（1971）、ならびに「抗日民族統一戦線と知識人——「満州事変」時期の鄒韜奮と『生活』週刊をめぐる——後編」（1972）、神戸輝夫氏の「日中戦争における文化侵略（3）——『抗戦』掲載「戦時教育方案」について——」（2001）、Coble, Parks 氏の“Chiang Kai-shek and the Anti-Japanese Movement in China: Zou Tao-fen and the National Salvation Association, 1931-1937.”（1985）などが挙げられる。本報告では、これまであまり注目されてこなかった生活書店の募金活動を取り上げる。生活書店による募金活動は、複数回にわたり行われた。ここでは、主に1931年から1932年にかけての二つの募金活動に焦点をあてる。一つは、1931年に起こった長江大水害のための募金活動である。もう一つは、1931年の満州事変（九・一八事変）以降、東北義勇軍（馬占山）支援のための募金活動である。この二つの募金活動は、それぞれどのように行われたのか、どの程度の義捐金を集めたのか。生活書店が公表されたデータ、及び当時の国民政府側、日本政府側の資料をも用い、これらの募金活動の社会的・政治的影響を検討する。本報告は、これまで言説分析を中心とした生活書店研究を、その社会活動の側面から補完する試みである。

日中戦争期の宋美齡—1942~43年訪米外交成功の背後

土田 哲夫

抗戦時期、蔣夫人宋美齡が蒋介石を補佐して通訳、外交、宣伝、慈善活動などで精力的に活動していたことはよく知られている。なかでも、1942年11月~1943年7月の訪米はその対外活動の最大の成功であると高く評価されている。彼女は中国のファースト・レディとしてホワイトハウスを訪れて最高の待遇を受け、米国議会で演説し議員達の喝采を浴び、さらに全米各地を講演旅行し、世論の熱狂的な反応を得た。さらに、彼女は戦時の重要問題に関してもF・D・ローズヴェルト大統領等の米国要人と会談し、交渉を行った。

だが、もともと宋美齡の1942年訪米の目的は病気治療という私事であり、外交・宣伝等の公務ではなかった。このため、彼女は専用機でニューヨーク到着後直ちに大学病院に入院し、約三カ月にわたって面会謝絶状態の下、療養に専念したのであった。

本報告は、スタンフォード大学フーバー研究所所蔵の宋子文文書、カーリー(Lauchlin Currie)文書、蒋介石日記等の海外資料に依拠し、宋美齡の1942~43年訪米の経緯、その華やかな対外活動の背後に隠された病状と治療を明らかにする。さらにその罹病の主たる要因と推定される過労とストレスをもたらした、戦時期宋美齡の外交活動と蒋介石の政策決定方式、そして米国政府と世論の対応についても検討を行いたい。